

手あそびうたの研究 IX

～『グー・チョキ・パーでなにつくろう』から子どもを理解することの意義～

◎沢口 尚子 林 美保 木田芳美 磯田 陽子 有賀 礼子 渡邊 朋子 二階堂邦子
 (葛飾二葉幼稚園) (佼成学園幼稚園) (佼成学園幼稚園) (手あそびうた研究会) (横浜市立津光台第二保育園) (大泉保育福祉専門学校) (日本女子体育大学)

1. はじめに

子どもは、どのようなもののとらえ方をするのか、どのようなことを考えるのか、手あそびうた『グー・チョキ・パーでなにつくろう』を用いて子どもの発想を調査した。このうたは『静かな鐘の音』という曲の替えうたで、現在保育園や幼稚園で多くあそばれている手あそびうたである。

今回は、保育者が子どもたちに自由な表現を求めた場合、何を思いつき、どのような考えをもっているのか、子どもの心の動きを探ることにした。

2. 方法

【調査方法】

保育者が子どもたちに『グー・チョキ・パーでなにつくろう』の手あそびうたを行った。両手でグー、チョキ、パーを組み合わせてどのようなものを発想したのか、出てきた発想を記録しながら子どもとあそび、発想が出なくなった時点で終了した。その結果を集計した。

【調査期間】

2000年11月～12月

【調査対象】

☆保育園(5園/10クラス)

幼稚園(6園/20クラス)

★5歳児(12クラス)、4歳児(10クラス)、
 3歳児(6クラス)、2歳児(1クラス)、
 1歳児(1クラス)、計30クラス。

【調査地域】

東京都(葛飾区、杉並区、世田谷区)、神奈川県(横浜市中区)

埼玉県(浦和市)、茨城県(笠間市)、山梨県(甲府市)

3. 結果及び考察

【1】手の動き

6通りの組み合わせのうち、1番多かった手の組み合わせはパーとパー、2番目にグーとグー、3番目がグーとパーであった。これは、グーとパーが自然な手の状態に近いから、子どもが出しやすいからではないだろうか。また、グー、チョキ、パーともに左右対称の手の形の方が多いという傾向がみられた。

全体的には、両手を近づけた方が発想しやすいこと

がうかがえ、例をあげると、グーの上にパーをつけて『ヘリコプター』、パーとパーをつけて『花』、さらに開いたり閉じたりすると『口』、親指をつけて横に手を開いて動かして『ちょうちょ』などと、手の機能性に応じた発想もみられた。

そのほか、『ウサギ』を表現するのにパーとパー、チョキとチョキ、チョキとパーなどと、同じ発想であっても様々な表現がみられた。

【2】子どもの発想

子どもから出た発想は合計637種類。各組み合わせではグーとチョキが108種類で、そのうちもっとも多かった発想は『かたつむり』、グーとパーが110種類で『ヘリコプター』、チョキとパーが77種類で『カミとハサミ』、グーとグーが114種類で『雪だるま』、チョキとチョキが83種類で『カニ』、パーとパーが145種類で『ちょうちょ』と、どれも子どもたちの身近なもので、かつ過去に保育者が子どもに対して教えたことのあるものであった。

【3】発想の特徴

パーとパーを頭にのせた場合、3歳児では『ウサギ』と発想していたが、4歳児では『ウサギの耳』とより具象化された発想をしていた。5歳児になると、『脳みそ』『地球』など、身近なものだけでなく、視野が広がり発想の幅も豊かになっていることがわかった。子どもが『脳みそ』を知っていたことは、知的意欲の現れでもあり、手の形を見てそれを発想したということに、子どもの考えなどをうかがうことができた。

さらに、ある子どもからパーとチョキで『カタツムリ』という発想が出ると、「殻がないからナメクジの方がいい」と子ども同士がより良い意見を議論し合う様子もみられた。このように1人の発想に対してそれに合わせたり、刺激されてどんどん連想していくなどの行動もみられ、改めて集団の意義をとらえることができた。

全体的にみると、子どもは語彙数が少ない中で自分の知っている言葉をグーとグーで『パンチパンチ』とボクシングを意味したり、チョキとチョキで『まつげクルクルするやつ』とビューラーを意味したり、ものを直接表現するのではなく、そのものにかかわる動作によっても表現していた。

また、家で大根を下ろしているところを見たことのある子どもは『大根下ろし』、電車に興味がある子どもは『パンタグラフ』など、それぞれの子どもにとっての身近なものを表現する例も多くみられた。

調査した保育者からも子どもたちの発想について「大人が思いつかない身近なものが多く出されていて楽しかった」「日頃発言しない子どもが発言し、子どもの新しい一面を発見することができた」などの感想があげられた。

【4】園の特徴

それぞれの園でしか出てこない発想もいくつかみられた。例をあげると、仏教を信仰している園ではパーとパーで『仏様』、英語教育を取り入れている園ではチョキとチョキで『M』『W』、遊戯会を間近に控えていた園では『タンバリン』や『カステネット』、園庭にクルミの木がある園ではグーとパーで『クルミ』という発想である。

これは、調査をした時期に園庭に落ちていたクルミで遊んでいたため、クルミというものを表現できたのではないかと考える。また、保育室に飾ってある絵を見てそれを表現した子どももいた。仮に保育者が違う絵を飾っていたならば、子どもはまた違うものを表現していたかもしれない。このように子どもは見たことのあるものすべてが表現する材料になり、子どもを取りまく環境が子どもの発想に大きな影響を与えているということがわかった。

【5】今後の課題

子どもは保育者の問いかけに対し、自分の思うことを意欲的に発想した。しかし、発言をしなかった子どもは、単に発想が無かったのではなく、ゆっくり考えたかったのかもしれないし、ほかの子どもに先に言われてしまったのかもしれない。そのような子どもをどのように配慮していくのか、ということが大切である。

また、子どもがグーとパーで『クルミ』を表現した時、意外な発想に驚き喜び、クルミを表現したことに感激して、グーとパーでの表現の意味を深く問わなかった。グーは固さを表現しているのだと保育者自身の観点でとらえてしまったが、もしかしたら“実と殻”と考えて表現していたのかもしれない。このように子どもが表現したことを感情だけでとらえていたことに気づいた。

保育の中で子どもが“動物”と言った時、大抵は何の動物であるのか聞き返すであろうし、それが“乗り物”であっても同様であると思う。

今回の調査において『ハト』や『ワシ』という具体的な発想も出たが、『鳥』という発想に対し、それが何の鳥であるのかまで聞き返さずそのまま受けとめてしまった。ハトにはハトの色や形、飛び方があり、ワシのはワシの飛び方がある。そのような鳥の何をイメージして子どもは『鳥』と言ったのであろうか。

子どもがものごとに対してどのような考えをし、何を感じているのか、保育者がそれらをとらえていくことが大切なのではないか。

～子どもから出た発想～

	☝ ☝	☝ ☝	☝ ☝	☝ ☝	☝ ☝	☝ ☝
回答総数(種類)	1 2 4 (108)	1 9 1 (110)	1 1 5 (77)	2 2 9 (114)	1 8 6 (83)	2 9 3 (145)
上位ベスト1位	かたつむり /15	ヘリコプター /21	カミとハサミ・傘 / 9	雪だるま /19	カニ /26	ちょうちょ /28
“ 2位	うさぎ /10	目玉焼き /13	お寿司・他6 / 3	ドラえもん・他1 /17	うさぎ /11	お花 /17
“ 3位	家・クワガタ / 4	お花・他3 / 5		メガネ /10	メガネ /10	カニ /12
ベスト3以外で 出た少数の発想 (一部)	カンガルー/弓矢/カエル ボールの発射口/ブランコ 蹴立て伏せ/お寿司/戦車 水道せん/電気/箸置き ガチャガチャ/シマウマ	カップ/くじゃく/餅つき クルミ/大根おろし/太陽 お寿司/ボクシングの練習 消防車/ハンコ/キャベツ ボールとグローブ/化石	ビニール袋/小人のダンス ペンキ塗り/反対の国/ 手が7本/つぶれた人/ 缶を切る/風あげ/お寿司 宇宙に宇宙人が立っている	鼠の穴/脳みそ/入れ歯 指/耳/ハート/ひげ/ 望遠鏡/天狗/きびだんご 毛糸/サンダラス/水筒 パトロールカーのサイレン	くさり/パンタグラフ/ 鼻水/長い草/根っこ/ 耳/M, W(英語)/ かたつむりが重なっている 洗濯バサミ/高速道路	東京ドーム/鑑証術/ お地蔵さん/足跡/耳/ おっぱい/ハート/お化け しゅりけん/ピラニア/ 変な顔/張り手/ニコニコ